

云、あじろごし、是又よめむかひの時ばかり也、常の時は、きいろのこし也云々、黄色輿も塗輿なり、

〔故實拾要〕長柄輿

是諸家中、節會隨役勅使等ノ時ノ乘輿也、此輿ハ社人等、神事ノ時ニ乘、長柄輿同キ物也、

〔毛利家記〕^三一右ノ翌年、^三○^{文祿}於京都秀元卿御祝言御調候、^略○中長柄ノ輿御召替トモニ十三、下

アジロノ輿三十六丁、結構ニ飾、金銀ノ金具ヲ打タル常ノ駕二百十六丁、御供ハ諸大夫迄ハ式正ノ裝束、常ノ侍ハ長袴也、最日本初テノ祝言タルベシト沙汰有シ也、

〔甲子夜話〕^{九十四}當日、^三○^{文政十年}三月十八日津輕侯ノ登營ニハ、牽馬ハ二匹ナルガ、コレモ鞍覆ハカケズ、紅ト紫ノ厚總ヲゾカケタルト、又轅ニ乗リタリト聞ク、四品ノ人モコレニ乗ルカ、隱倫ノ身ハ、カ、ル雲上ノ事ハ、今ハ露ホドモ辨ヘズ、

〔甲子夜話〕^{九十六}前九十四卷、^略○中弘前侯ノ轅ニ乗テ登城セシコトヲ云ヘル結句ニ、四品ノ人モコレニ乗ルカ、隱倫ノ身ハ、カ、ル雲上ノ事ハ、今ハ露ホドモ辨ヘズト記セシガ、此頃聞ケバ思モヨラズ大事トナリケルトゾ、

申渡之覺 四月(文政十年)廿五日

津輕越中守名代

岩城伊豫守

今度御昇進御位階之節、[○]德川家齊任太政大臣、[○]德川家慶敘從一位、登城之砌、轅相用候由、然る處先達テ父越中守ヨリ内意申聞候節、轅相用候儀難相成旨相達置候處、其心得も無之、此度相用候儀、不束之儀と思召候、依之逼塞被仰付之、

右於下野守宅老中列坐、同人申渡之、大目付織田信濃守、御目付曾根内匠相越、

又聞ク、或人當日途中ニテ見タルハ、彼侯退朝ノ時、兩國橋ヨリ居屋鋪ノ方ヘハ行カズシテ、川端